

# 「道」を福祉施設に

- 遍路道を軸とした町の健康維持装置 -

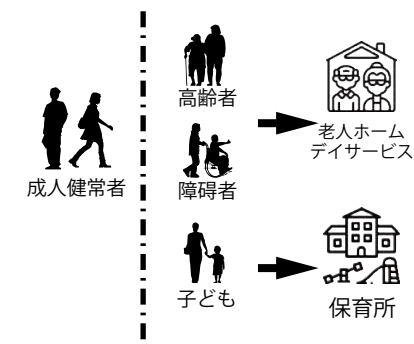
四国八十八カ所遍路を精神的なリハビリ装置と捉え、お遍路さんと地域住民のためのリハビリ施設を計画する。遍路道に絡めるように運動・音楽・言語・作業療法の4棟のリハビリ施設を配置する。建物間は歩行訓練や運動療法などのための「福祉の道」として計画することで、この町の中心である遍路道に多様な人々の福祉の風景が重なった、町の新たな日常を形成する。



## ■計画条件

□ 隔絶された地域福祉の「日常」

少子高齢化に伴い縮小していく現代社会において、多様な背景を持つ市民が主役として生活することを理想とした。福祉を中心とした街づくりの機運が高まっている。しかし、社会には健康者と障がい者の境界が根強く引かれており、特に車を中心としたライフスタイルである地方部においては、生活風景と福祉の現場は乖離しており、福祉の日常が街に滲み出すことは少ない。



## ■計画敷地の現状

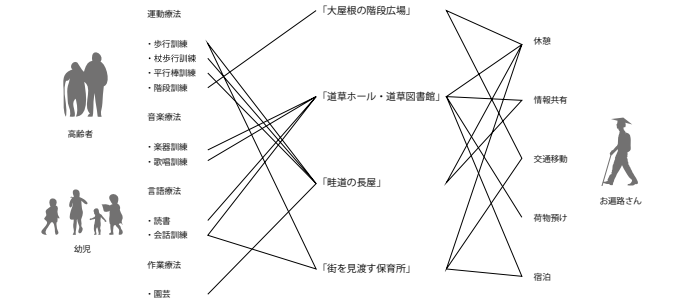
□ 敷地 愛媛県宇和島市三間町

愛媛県宇和島市三間町は、山々に囲まれた人口6500人の小さな町である。町内には、四国八十八カ所の霊所である龍光寺・仏木寺を有しており、多くのお遍路さんが遍路巡礼で訪れる。現在、町内の65歳以上高齢者の人口割合は45%に及ぶが、町の福祉の現場である老人ホームやデイサービス施設は閉鎖的な郊外に点在しており、将来的に高齢者割合の増加による町の中心部の空洞化が懸念されている。

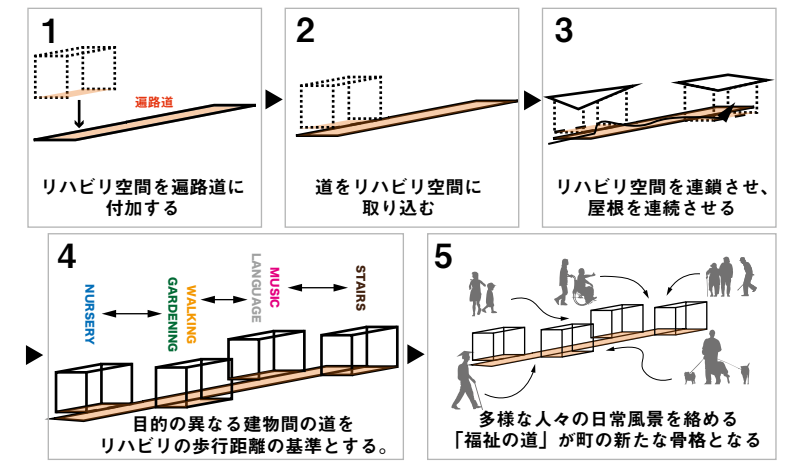


## ■計画提案「人と町を繋げる福祉の道」

四国に点在する88カ所の寺院を歩き廻りながら精神統一をする遍路巡礼は、古くから地域住民が巡礼者を接待する遍路文化が形成された。私たちは、歩行による「道の共有」に地域の新たな交流を生み出すポテンシャルを見出し、三間町の精神的骨格である遍路道を軸に、4つの福祉の拠点を計画する。

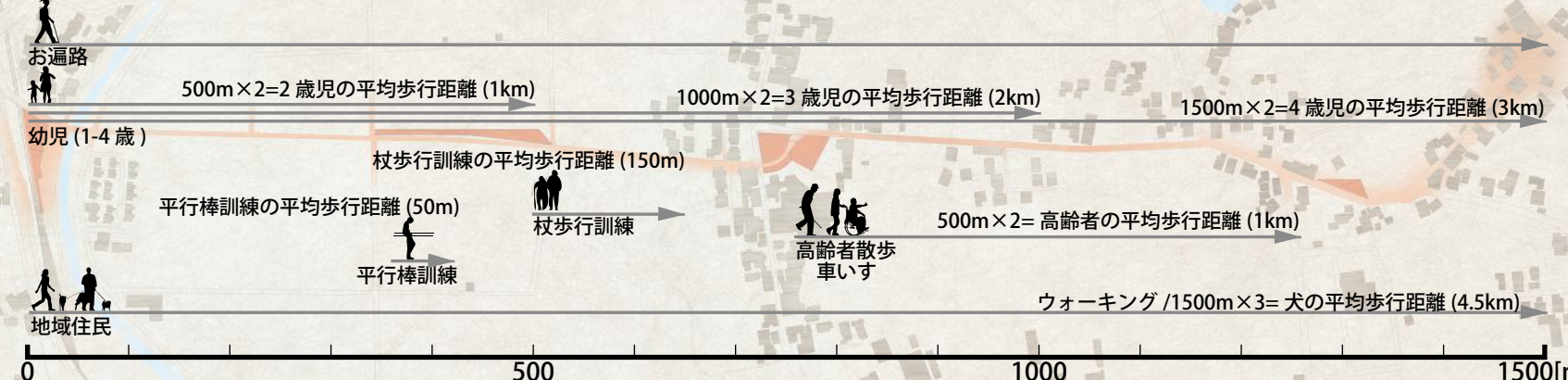


## ■計画ダイアグラム

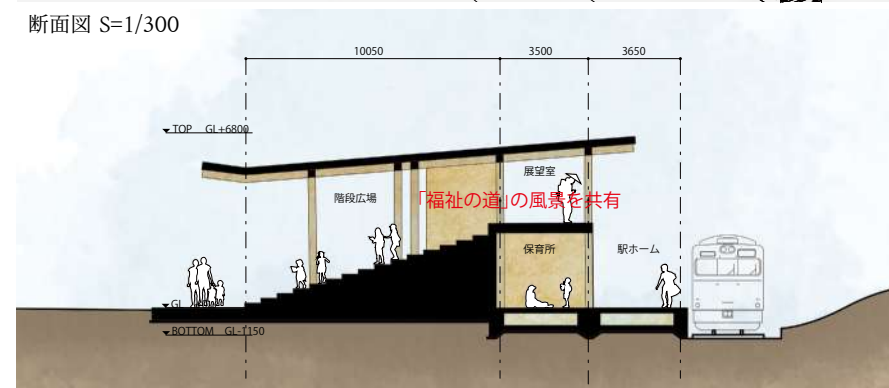
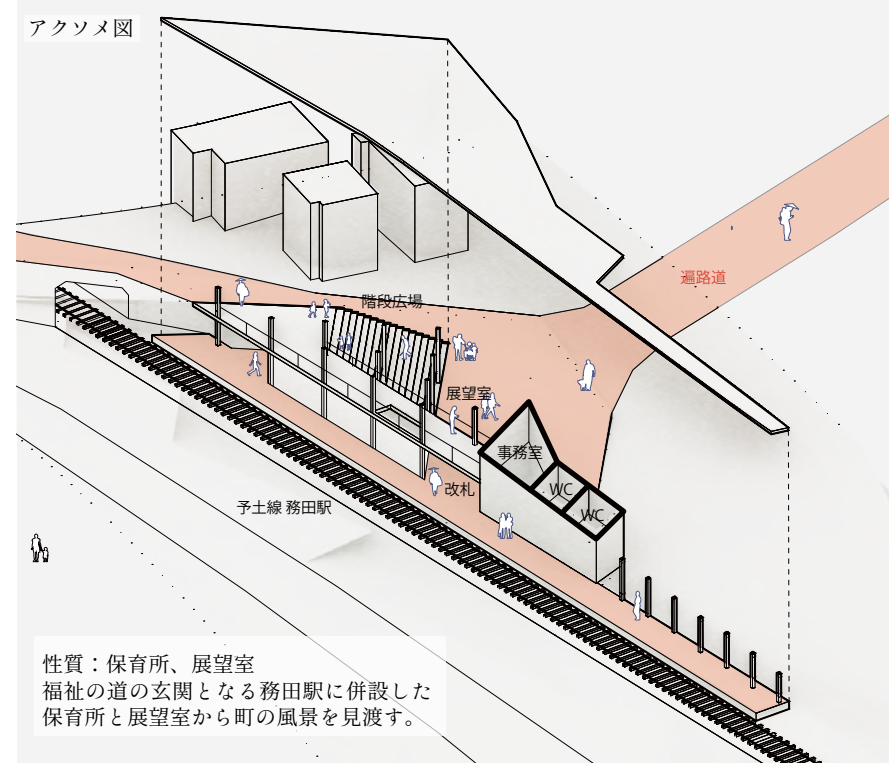


## ■「福祉の道」マップ：歩行距離の違いと福祉対象の関係

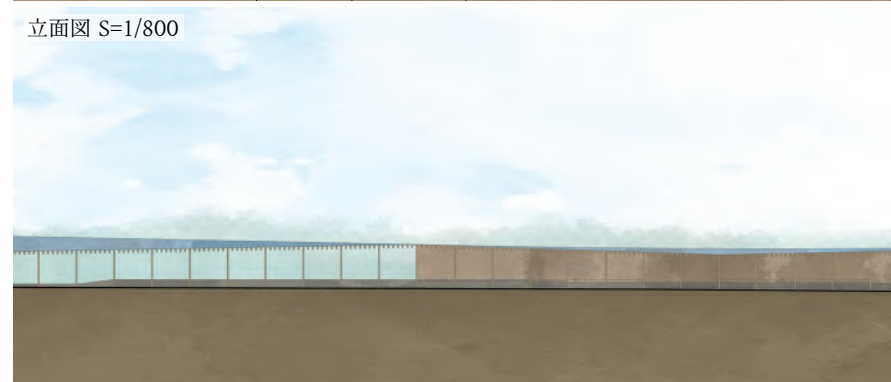
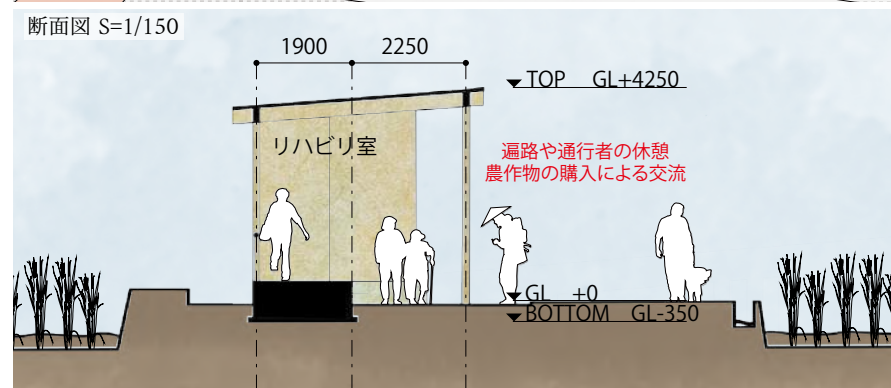
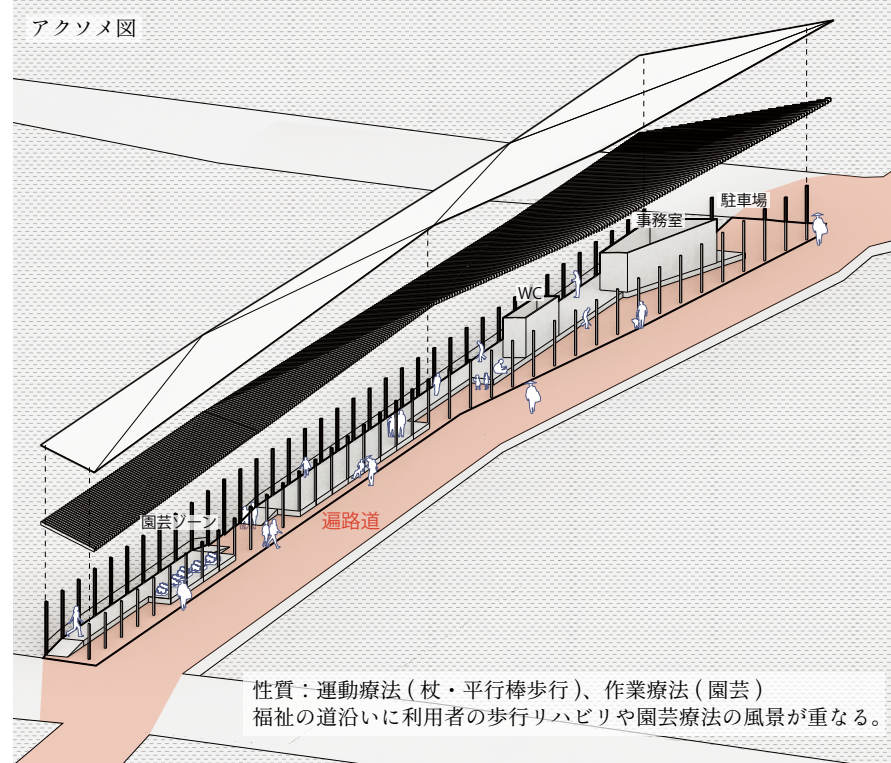
運動療法・心理療法の一つである散歩・ウォーキングの目的・距離に応じて、建物間の道を使い分ける。それらの歩行者と遍路が歩く様子が道の上で重なり、町の新たな日常風景となる。



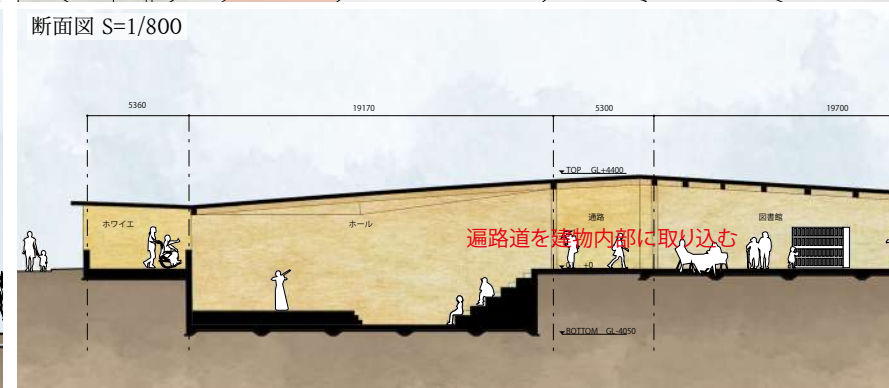
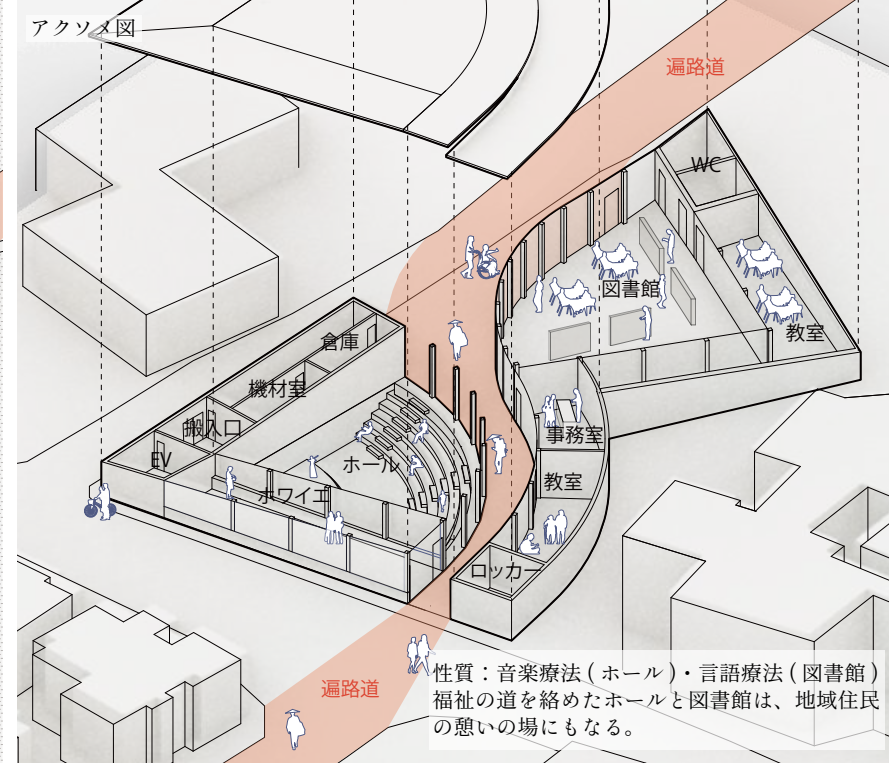
## ■計画01 町を見渡す保育所



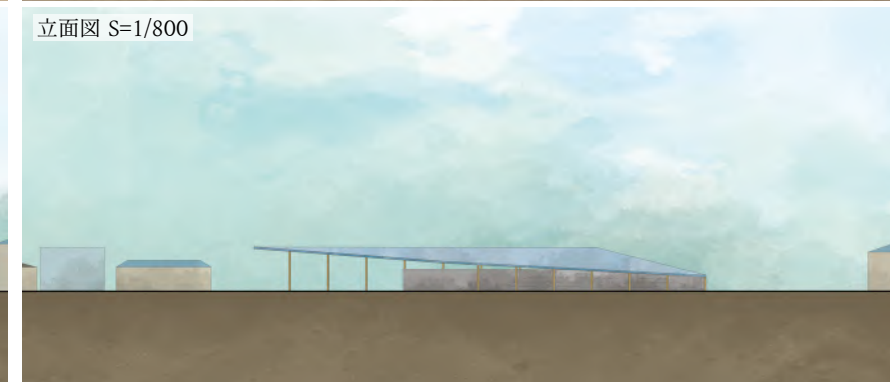
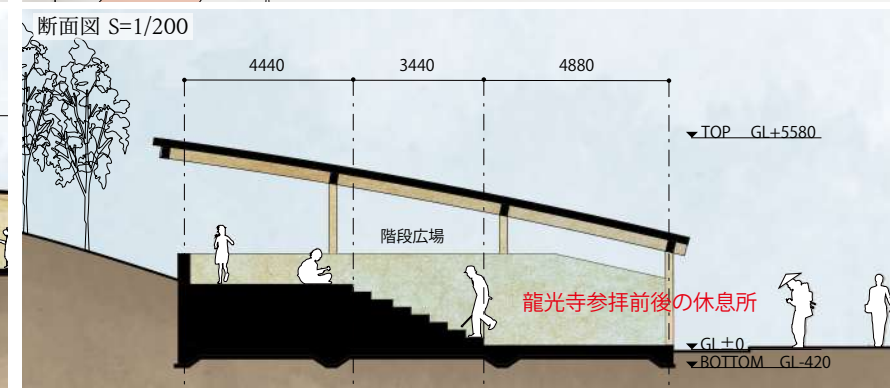
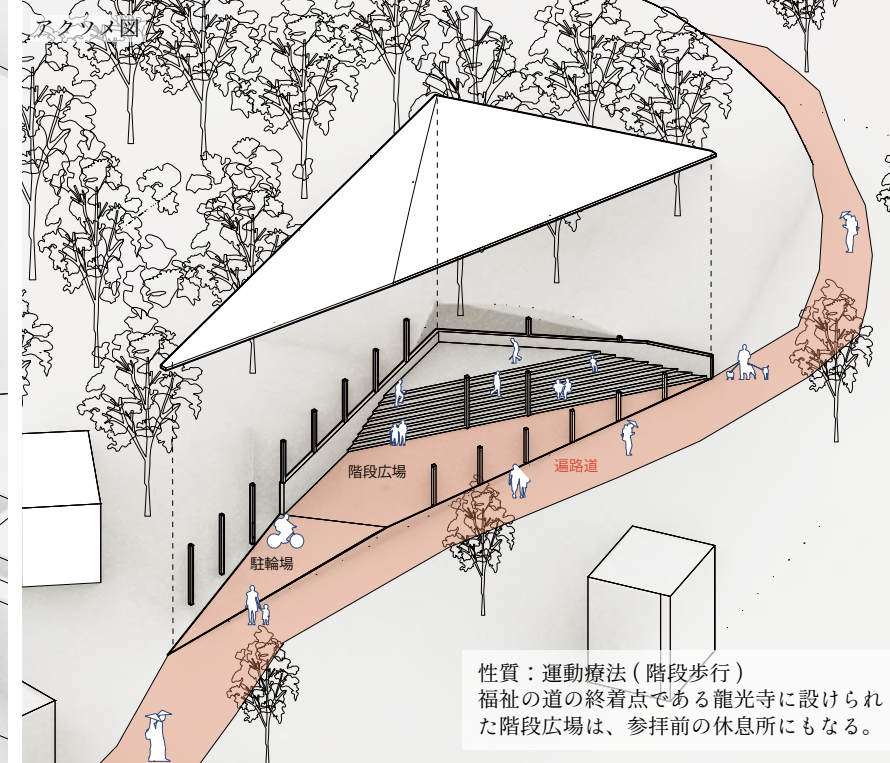
## ■計画02 畦道の長屋根



## ■計画03 道草ホール・道草図書館



## ■計画04 大屋根の階段広場



## ■パース

